



## ボールを投げる人

詩の話ばかり  
分ったように  
自分のかしこいのを  
こだしにしようとする  
えせ手品師  
それでも僕を好きか  
君も小さな  
ほんの小さな星なのか  
僕と同じように、  
僕がみているものは  
僕自身のおろかさだろうか  
君の料理を想像する  
少しどんくさいけど  
味つけにこだわりがありそう  
君の可愛らしさ  
どんないいものも全て  
子どもらしさを持っている  
君のおろかさは  
僕のおろかさかも知れない  
今まで通りとはいかない  
もつつよい握力がなければ  
たとえ僕が  
夜ごといのり続けたとしても  
何かつよめられて  
きよらかになっていくものは  
僕の中にあるのだろうか  
あるとは思えない  
思えないけれど  
ある日ふいに何か  
かたくなる  
その瞬間を期待して  
今夜も僕のこころの中の  
一番くらい場所にむかって  
ボールを投げる人がいる。

## 冬が来る

もうすぐだね  
冬が来る  
しなきやいけないことも  
にげてしまえば  
こっちのもんだ  
任せなさい。  
きっと君を驚かせる  
僕のやり方は  
猫のやる芸のように  
しなやかだろう。  
それを見る君の顔は  
冬の石垣のように  
しずかだろう。  
そして  
ゆめみることを  
終っていくことを  
さとり切っている  
うたれている  
互いのこわれやすさに

うたれている。

風にのる詩人

風が  
早く言いたがっているよ  
好きです  
と

風の吹くほうに  
木が二つ立っているよ  
くろい  
くろい木  
ピンクの木を護っている

僕は  
あなの中だ  
虫がいっしょに棲む  
木木のはだとは  
においが全然ちがうよ

風によって歌っている  
僕の詩人  
その詩をよむのは  
君の声

君の  
こまった顔  
難しいね  
なやましいね。

そう  
そのすべては  
これでいいでしょう

ひいき

御世話になったんだろうけど  
すてなくちゃね  
すてなくてはしかたがない程の  
大きなものを拾ったんだから

君は自分の事ばかり考えていられない  
君は僕のことも考えなくてはいけない  
父親のうで時計をぬらしながら  
川をくだって行く  
君のサンダルをとりに走る事は  
君だけにしか  
それをしてあげる事が出来ない、  
僕のことも考えるんだよ

欲しがっているものがながれて行ったんだ

君は君ひとりで  
お酒に詳しく  
星座に詳しく  
君は君ひとりで  
今まで

ものを失くして来たんでしょう  
そう  
君もまた  
いつの間にか何かをひろったんだ

忙しくうごく  
自分のイメージと  
僕は君を  
ひいきめにみてるよ。

#### 結婚

ラインで連絡など  
よしてよ  
声を電話で  
聞かして欲しい  
君の声は  
ボールの中の  
スポーツカーのように  
くぐもっている  
エフェクトがかかっていて、  
それが好きだ  
僕は君に関して  
ただ、唯一  
声が好きだ  
それはひとりの  
善い男をよぶのに充分  
ああ  
綿のジャケットをぬいで  
やわらかな場所で  
たいだになっていたい  
ちぎれちぎれになったもの  
ボールの中を  
飛んでいく  
スカートの中の  
スポーツカーと  
結婚という言葉  
使って欲しくなかったのか、  
君は。

#### 都合の詩

そっぽ向いていたって  
にらめつけていたって  
どうせ見ることの出来ない場所に  
君はいるんだから  
僕はその深さのさなかで  
太陽のおちるのを待って  
テーブルに広げたお菓子の袋  
君はひとつも手をつけなかった  
僕は君の矛盾したきれいさで  
こんらんしてしまった  
撫でることの出来ない場所を  
撫でようとして来た人がいて  
その人は今だれからも知られず  
気にされないままに  
たいだな人になっている  
君は知らない恋人の

すぐ目の前まで行って  
子どもらしい感じをみせている

#### 希望

希望という文字の  
フォントの大きさは  
その海から君を  
ひっぱり出すことすら出来るのか  
でも同時に  
僕の頭の上にいる位のものでないと  
そんな矛盾ってあるのか  
君は僕の横で  
あなをほるだけ  
海を離れるだけのいのちを  
うけ入れる準備が出来ているのか  
出来ているのなら僕ら  
ちからもちになれる  
そんな無謀な話  
今はきかしてあげられない  
そんな位なら  
もう辞めてしまった方がいいんだ  
どんなに暇でもいそがしくても  
独り言に君の名前を言う位なら  
自分でも分らないよ  
ページが破れていたんだ  
君がその分を持つてるのなら  
持っていさえすれば  
石が風になって  
もう一度生きる  
やる気になれる

#### とび箱の詩

君に  
優しくするってどういうこと  
うれしくなった気分に  
優しいなんて  
自分で認めるのかい  
君を  
可愛いなんていうことは  
なぜどこで君が  
可愛いとかんじて  
僕はその言葉を  
信じれるんだろう

ロイター板のような  
人がいる  
とび箱をとぶ  
人がいる  
とび越えた先にある  
場所の匂い  
そこで君を  
僕を  
さがしたい。

#### 車の詩

もうかなしんでいて欲しい  
車にひかれる前から  
先に行って僕のことを  
かなしんでいて欲しい  
涼しいということは  
くるしいということで  
君の手の温かさを僕に  
感じさせているんだ

車通りの多い  
新宿と渋谷の境い目の道で  
そこから僕は  
だんだん涼しくなっていく

無題

山頂にあった  
雪をふき取った  
君のことをかんがえていて、  
ああ  
台車のように可愛らしかった。  
(前は写真立てみたいだった)

シンバル

よっ払って  
詩を書いて  
明日などないのは  
知っている  
現実と詩とでは  
ちがう  
ああ  
そんな感傷たち  
ロマンたちを  
ふつうに目では  
見ることの出来ないものを  
本当に日常で  
僕は感じられているのだろうか  
映画にならない  
様々のはなしがある  
それをどうして  
人に見せるのか  
いったいどうやって  
僕は君とのなしを終らせよう

ここにシンバルのスタンドがある  
シンバルがある  
女の子がいる  
人生で一度だけ女の子とやる  
でも女の子はひとりしかいない

帰省して

帰省して  
あてもなく家の回りを歩いた  
よくかべ当てした近所の公園

遊歩道には雑草が目についた  
くちうるさい管理人のおやじも  
もう死んだのだろうか  
その道を抜ければ  
スーパーの方まで下り坂が続いている  
誰か友達がここに住んでいたとか  
誰かとこの誰かの家へ行ったとか  
思い出せなくなった記憶も沢山ある  
夕闇せまる中で  
しいたけを焼くような匂いがして  
その景色は遠く  
一枚の絵のようにみえて来る  
上京して長く  
ぼくはその匂いをかがなかった  
あの頃と同じように今  
坂をくだり家へ帰ってゆく  
あの頃と同じように  
イヤフォンで歌を聞きながら  
そのときは  
ザ・ピースだったか  
今はバンパイア・ウィークエンド

家の前に着くと  
隣のおばさんが疲れた様な顔で出て来る  
ぼくを忘れたようだ  
おじさんもいて庭に水をやっている  
そういえば今日は  
日曜日だった。

夜明の少年

家族と歩いていると  
泣きたいような  
気分になる。  
あつかろうと  
寒かろうと  
風のおいに関係なく。

僕の頭のなかの  
うつくしい短編小説は  
だれがその本を買ってくれたんだろう。

リビングの食卓の  
うらの落書。  
僕がかいた落書。  
クレヨン。  
姉と兄と  
みんな画用紙に絵をかいた。

今  
どの季節のものか分からない風によって  
足もとがふわついて行く。

車でよく通った  
国道の上を行く。

親戚達の  
すんでいたまちの上を行く。

今はもうないはずの  
商店街の上に行く。

廻り灯籠の夢が  
山手電車によって  
何もかも。

見えるさ。

少年は早く  
絵をかき終えたい。